日光山志

四

ル 4
329
4

門 祝呂54
號 329
卷 4

日光山志卷之四

目錄

華嚴瀧日圖
巫女石
中禪寺別所
古滝端
大香居
三層塔
中禪寺境地并湖水圖
拜殿
唐朔香居
光藥圖
牛石
什物古磬日圖
中禪寺古株札写
護摩堂
採燒護摩所
本地觀音堂 妙見堂 摩伽羅天堂 稻荷堂 山王社
石燒籠
冠木門
男体山禪頂小屋
不斷火
老大黑彫像
滝樋
古谷
三社権現本社
本戸口

私禰頂
弘法大師記文
慈悲色香図
勝道上人之神新宮を建しの図
如宝山図
屏風
日蓮古跡
子子原
赤岩
地獄茶屋
神山
法華窟厳寺跡
茶花教稚
中禅寺私記
妙雲樹
南湖
寺崎
上野橋
子子砂利
瑞蓮寺
本又寺跡
神石
精法橋古跡
古碑
武村原
男体山 並古宮
男体晴雲 八景の内
南岸橋
石楠花図
子子崎
菖蒲沼
龍頭瀧 日図 其二
顕釋坊瀧
四條寺跡
般若寺跡

梵字岩
標茅原 並古宮
白糸
蓼湖
佛湖
中禅寺温泉 日図 八景
赤白根山
肉蓮華図
同源谷岩茸図
足尾峠
足尾山中銅と砂石と沙汰する図
不動沢
老松崎
赤沼原図 其二
西湖
魔湖
湯湖
金精峠
白根山図
栗山々十村
羽山隠鶴
山中羽姫図
庚申山図
荒井
日光沢
福田
板室 塩原
小俣 渕西
足尾山々十四村
奥白根山
白根蓼図
不動温泉
戦場原流
野蜀湖
精進湖
紅沼
湯平

日光法師名産　金石　花禽　魚虫　菓蔬　茶木
毛獸　飲食類　細工物

日光山志巻之四

植田孟縉編輯

華厳瀧

此花瀑を中禅寺湖水より流来る所路凡七八町流出て瀧口より直なる道路又一派乃河の如く幅十間程或は七八間の所もあり依南流より田代町流出来りて板橋を架せり是を南岸橋と唱ふ長十間許此の橋を欄演への西路より又を足尾へ掛る上州筋より海る道の足尾峠乃頂上より岐路を經ると凡二里許の嶮を渡て愛へ来るまこと本道を經て中禅寺へ海るものを丈平の道程ふたたへ行べき平坦の小路あり凡六町程をたどりてかきて此花瀑の直ふ流る是を大谷川の水源なり高七十六丈といふ此瀑を東国第一の瀑うつく瀧口幅二間程瀧下を人凝乃かよふ所ら

華嚴瀧

華嚴瀑布圖
辺見寫

さるゆゑ瀧を眺望せんべき所なく瀧壺より二三十間程も東寄か
懸崖に差出さる危岩より蔦蘿を打さくを繫の上へ下り蔦蘿をか
ゝり枝を延なべて花流せる水勢を覘見るに実に直下せる
激勢遥なる水烟雲霧盤渦とし〳〵分ちがく〳〵毒巖瀧と名附る
縁起なり此山中有瀑則湖水流泓青巒高嵯紅日早照清瀧近遠岩
上繁花芬々恰如涵錦似巖瀧因名華厳瀑云云 泄華巖瀑あるゆゑ
又深沢なる方等滝殺若瀧の名を起る歟

冠木門　中禅寺境内入口なり此門乃名称合門とも称すとゝふ

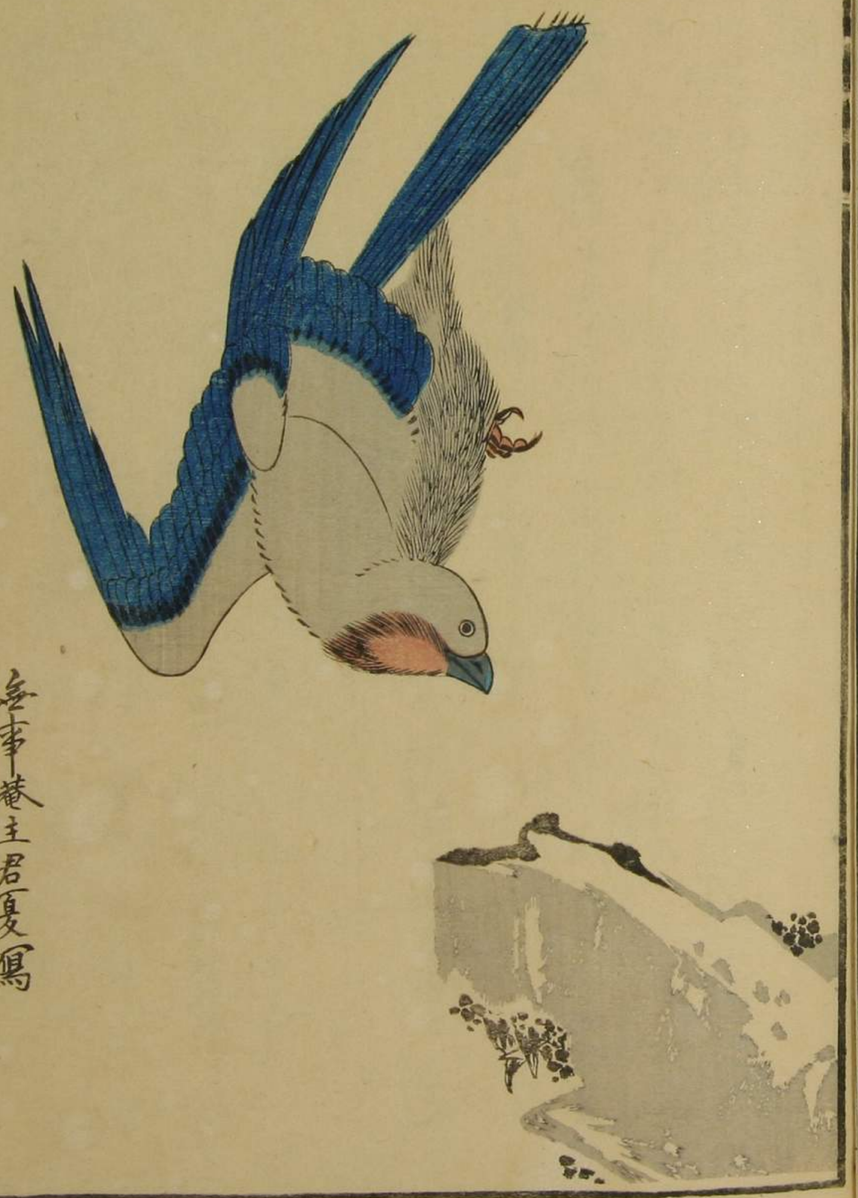
巫女石　毒巖瀧に沿ふの路傍ふかり其かゝち巫女の立る体顔あり石
と化したるいつれを巫女ハ神ふ仕ふるものなれど尚山を牛馬女人
禁忌の地へ登りくるゆゑ神罰を蒙り忽に立ちくゝて石と成と云傳ふ

牛石　冠木門なる路傍ふかりて牛の伏くる貌ふ似くゝ七尺ふ六寸
ゑ六尺許脊の高き所三尺許巫女石のゆく牛るを撫ぶる心
よくく牽来るゝの忽ち四足すくゝく石と成れる由亀と覓しき完
存なり

男体山禅頂小屋　毎年七月朔日より同七日朝を禅頂する行人数
千登山し此小屋に籠り居て精く行法を修しく中禅寺上人とく
流法乃内より年番に当る僧先達し七日乃早朝より出山を起
七月朔日出所を登れる以前曰十八日別火し垢離をとり日く行
する事終て此所へ出ることなり朔日より七日を五箇所ハ
神門を古方より下さゝふとゝふ小屋数凡二十棟所區別し番附す
く又拾番を有て湖畔の香石乃最後或ハ別所の傍を終て
小教堂
中禅寺別所　三重塔乃東寄なるより弘法大師の記文を考るに勝道上人

岩燕

華嚴瀑の峻谷ハ巣ひ常に霧間を
回翔するの燕より往ハ大すして尾
二ツハさゝげ尾先ハ針のやきりのゆゑ

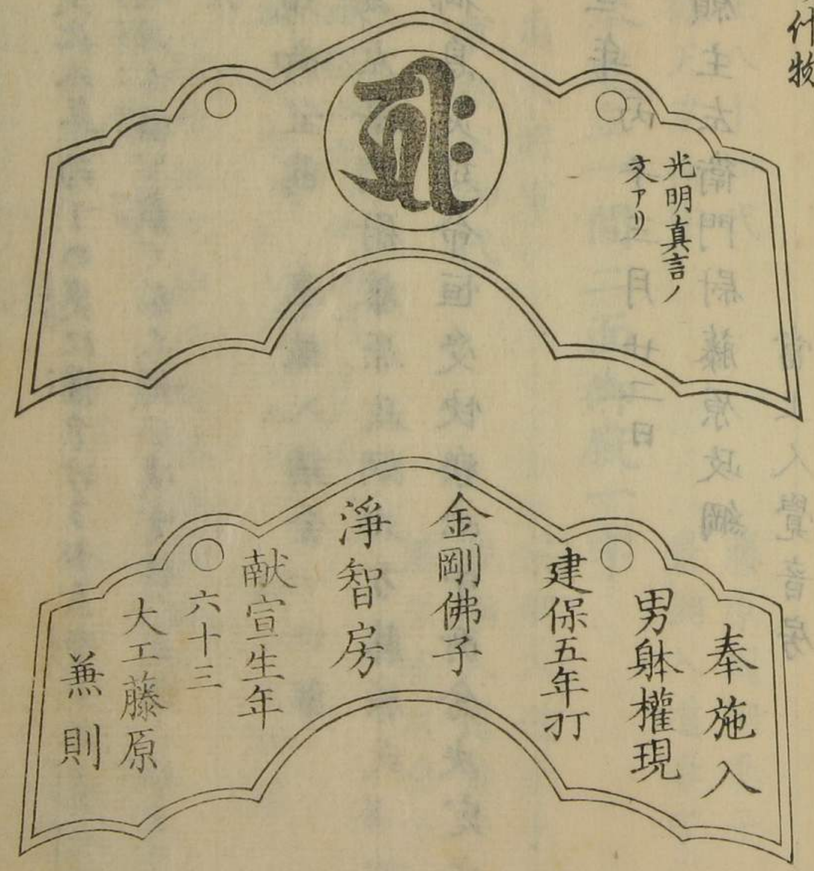


無事菴主君夏寫

延暦七年四月空山せられ竭庵を淵ゑの水潦み接すとゆるハ其時上人
奏を爾迦又補陀洛山神宮寺と號し一宇の堂ありといふ是より中
禅寺の称号ハ起るといふ建神宮精舍號中禅寺ここ古くより一山乃
上人職の号を賜ハる限なく山籠して寺勢を司りしかど寛永二年いハ
迷ふく是より御本院の御持となる迷る由今も一山衆徒の内擯斥し者
ハ一坊壱人御本坊の内家来壱人宛住番し外に下級一人住り又
一坊の内より演役といふハ七年暫ハ勤る由又御宮乃社家是も手繦乃
次席を以て社檀現の社勢城司るといふ
不断火　当別所ハ爾迦ヨ来火を絶すことなく庫裡の大居炉裏乃
中へ大材をふ焼べ垂冬夏絶ざるゆえ古人いふ神代よりの火なりと
以て日光山内を初め町々乃家へも宮初宴乃火を移て各ゞの家へも
絶ざるやうに取計ふ古風なりといふ

中禅寺別所什物

磬の図



古鐘の銘

洪古鐘を文化八年丙丁の災に罹りける力を翌九年奉命新鑄
と溶する時洪古銘を載て茶大僧正凌雲沙門尚祥と銘ぎり其銘
文茲に略す

日光山權現御宝前　奉施入鑄金一口事
右志者爲左衛門尉藤原政綱北方藤原氏并所生
愛子等御息災延命恒受快樂心中所念決定成就
也
建保三年　丙子三月廿二日
願主左衛門尉藤原政綱
當上人覺音房

中禪寺古棟札寫

人王八十四代
順德天皇御宇
奉建立一間二面御殿一宇
征夷大將軍　藤原國綱妻子
源實朝公御代　景綱入道妻子
宗綱入道妻子
親綱入道妻子
藤原有房妻子
建保五年丁丑四月十八日
同　六年戊寅七月十九日　鎮守之地頭
結緣衆左衛門尉藤原朝政

古棟札保延久壽永曆文治建久等文より後も造營の年數多き
るも悉皆略す

中禅寺走大黒影像

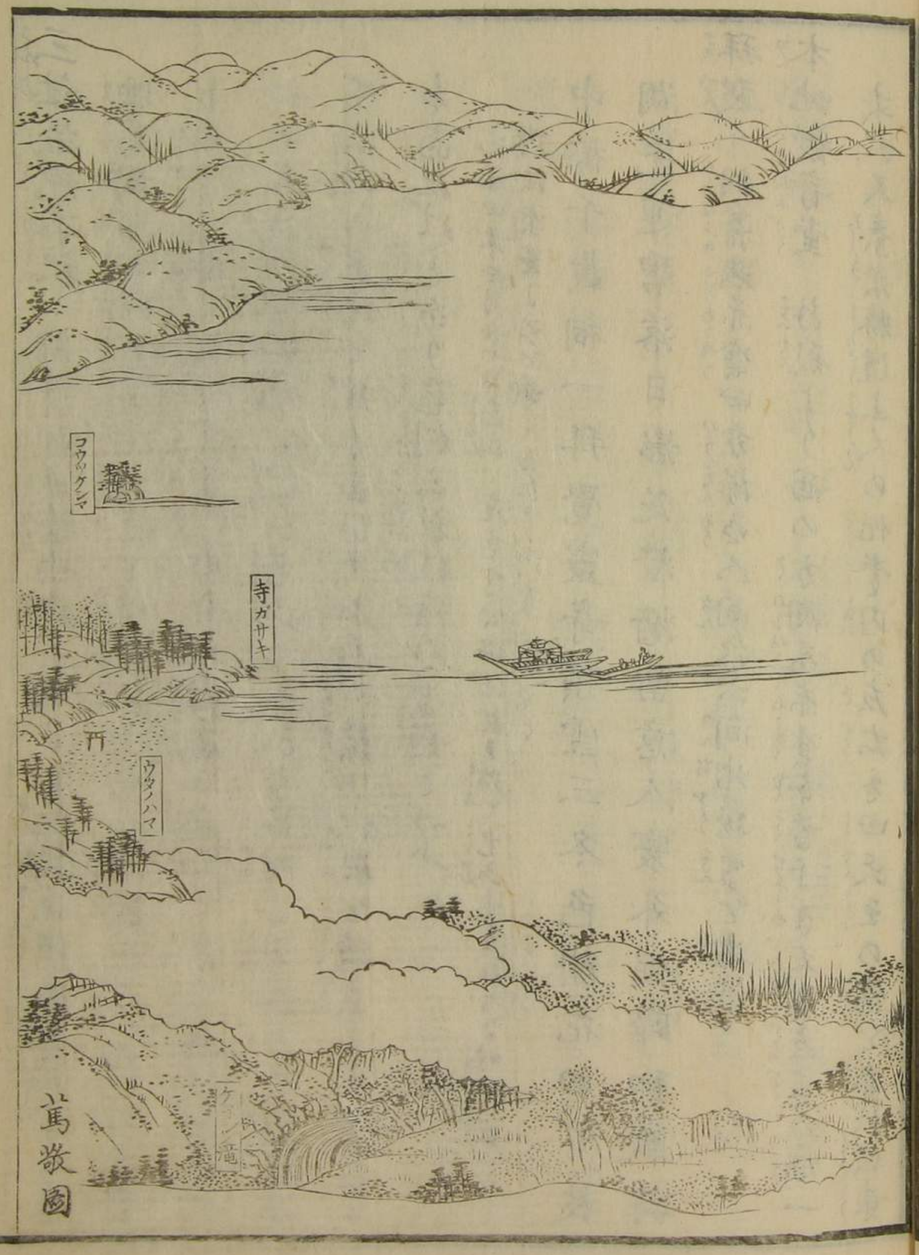
走大黒影像

此霊像の来由を尋るに往昔城華坊と称する衆徒中禅寺の上人まうし時毎年秋は五穀を伯方よりとも勿迷ひ一丈乃嵐栗稗の種をくいに来る別而は獣をかくる人焼きき山中に栗稗の為べき事かと上人不思議に思ち迷彼嵐の足に糸を付て其跡を慕ひ山の麓に至れば人家あり多く依て其地を中禅寺の社領とす是に糸残付て見出しかる所の恵文より是尾にとも名付しとかや上人刎寄見乃思を為し見を案て大黒天とを祀ひ奇瑞多く大黒天を十二支の子と定るゆ故ありとぞ亦不思議なる彼嵐乃形相自然に化して大黒天乃尊容を現ずるを像老ふ乃ゝ中有とく時乃上人ち迷を波を利大黒天と称し奇瑞崇伝するのゝ市絶ざら迷とるゆを奇瑞あるゆ揚て かゝぞふべのら沢老るといふ迷に題乃義理ゝ亦假宗ゆ波之利と書ゆい別る秘密の事なりと雖さ迷を滅上ゝく紀の迷に老て暴風ゝを省て水難ゆ遇ざる謂を以て紀中乃守護神とを なきを崇べて一切の乃ゆ敬く伝公乃感霊多間ゆ市く士農工商とを ゆ貴賤乃貧乏乃殺戮するゆ老ゆくみ出とゆるゝび故に福徳守護の神と申なりすゝ世を像乃大頼と称ゆる事なを一ゝ貴窮の元生ゝを福徳と

ゑ〳〵二ゐハ疫病の流生ゐを療業を与〳〵三ゐハ造悪の流生にを若ゐ
と与〳〵四ゐハ短命ゑ流生にを延寿を与〳〵五ゐハ悪癩の流生ゐハ智恵
我与〳〵後ゑんゐの誓願なりとぞ
廻国雑記云出山のうへ三十里ゐ中禅寺ゐ
して西表し侍る今宵ハゐふ十三夜ゐく月もいとくかすゐれ侍り
き湖漫たる湖水侍り秋の渓といつる所ゐ紅葉をどゐゐひく月
ゐ映ゐ侍るを舟にのりて
岌し侍りうゐれ渓を舟ゐ
翌日中禅寺をゐちゐぐけるゐふのゐちしるる紅葉ゑ紅霜のゐまゐ
ゐえゐれば先達しける流徒長門乃豎若といつるゐのゐいひきを侍りる
山ふゐのき若れゐのさゐを与ゐ
かしゐ下山侍りるゐ黒髪山の禁を西侍りとゐ人いひきをとも侍りるゐ

ゆりにるゐをとゐ我ゐをゐいふをを思ゐみゐも雪をまりゐん
おゐゐ山乃ふりゆゐゐ迎ゐるゐをゐのをゐるをゐ
日ゐのゐ紅ゐくゐのる鞠の毛もかゐるゐり黒髪山の岩乃ゐの事乃
大鳥居　唐洞湖ゐ渡る建ゐ為ゐり石階を光り平略ゐりまく石階
二ヶ所を上りて観音堂ゐ正面ゐり
護摩堂　三間四面石階を光り観音堂の前
鐘楼　二間ゐ三間絶ゐ古き手の回縁ゐ及び今の鐘ハ文化年中鋳造
三層塔　赤塗三間四方又智如来を安置ゐ右の方にあり
揉燈護摩堂　絶楼ゐり東乃方愛の渡ゐり一階宮く築地ゐり
古釜　二口護摩堂の根ゐあり径三尺ゐ六寸銘ゐ一ハ貞和二丙戌年
二月聖紀阿弥陀仏佛奉施入中禅寺一ハ應永廿三年の銘を彫ゐ
底ゐて所〳〵損ぜり此釜ハゐ〳〵大形ゐり

中禪寺境地並湖水圖



三社權現本社　羽蓑總赤塗南向二間ヨ二間大床造第棟減金しの名
物高欄服物彩色四面之扉黒塗鰐口ニツ掛ぐ瑞籬田亀と彩色し光
も赤塗四面と東北方ヨ門あり内庭ハ玉石を敷き勝道上人ら
仁七年教旦道珍等を使ひ光山しのひろ原時ヨ男神山の頂上ハ
て三神の新宮を拜し西ひヤ山乃時葉ハ社殿を造立しるふとゆる
ゑ當社ハ三ヶ所ハ三社殿乃茅葺とゆふ
元禄四年四月廿七日當山　産土宮公輝法親王始て光山しるひる時神弟子
潮法樂亜ヨ訪を頼し西ひく頼者紀とゝ

中禪千載祠一拜覺靈奇積雪三冬色開花四月枝
湖光連碧落日影泛澄澹留意人寰外促歸聊賦詩

拜殿　羽蓑赤塗四方掛西ハ間に六間地蔵堂を安し
本地觀音堂　拜殿より西の方洞尾赤塗本堂千手大士立木の像一
丈六尺素木勝道上人の作書内の左右を四天王の像を安し坂東
十八番の札所なり
觀音の御殿あり　坂東順礼記とゝふものハ出る由
中禪寺堂　扁額ヨ乾して向様ヨ掲ぐ
補陀洛中のゆゝ拜む湖乃ほとりに立木乃ちゝのひ久しく
末社　妙見堂　拜殿内大赤造　根本堂　本堂慶安元年安し
戒壇堂　本尊受戒の
傳ハ以ふ弘山と補陀洛山と名付られしゆハ往昔開祖上人當山
草創多年の間屢觀音の靈驗を被ひて殊ヨ延喜二年光山し
ゆひ西湖の南岸ハ於く大士の新宮と感見まし〳〵てこゝうゝ
号容と多創しく安立しるひうの上人傳思惟しるふに二荒各處
の山中ハして觀音憂婆塞の稚く乃奇瑞を示しるふと見たゞ者伝
かのみにゆゝ乃當山を必大士有縁の靈地なるべしゆゑ拜しを

摩伽羅天堂　山王社

玉泉大士の垂迹なり小南海の補陀洛山と世所か標額して那智山
と補陀洛山と名付給へるよし

唐銅鳥居　男神山宮りにあり男神山大権現と行基菩薩
産土宮の御玉殿なる額を掲げり

石燈籠　二基香居乃内にあり

本戸門　七月七日禅頂せる者是より宮の内に入る

船禅頂　是を六月朔日より開闢し同月十一日より十九日と宮船嶺中
の者連日漕出し巡拝せる なり是を船禅頂とふ又七月中を船ふ
りの行迹は船を出し名付て是を補陀洛船と唱へる由男神山禅
頂せるものも別に勤行して山禅頂と南方並て禅頂せるものも
是一様形なり

古碑銘　性霊集に載たる弘法大師の記文乃銘なり唐朔香居の
せるなり勝道上人神護景雲元年より波濤を冒して渡海し近畿の
初に登陸を極めたる銘文弘法大師書記しなふ古碑なり所に
有しが破壊して文字見へる所あきに仍て当山産土宮
准二后公辯法親王御再興
准后の御撰文もあり是を不朽に伝へ玉へんを望奉て朔香居の
箱を造て石碑の上に被せしむる由表文を見て称ど朔の筆
小細字に雕附せり此碑を唐朔香居の前に建て銘文次に出せり
當山産土宮
公辯法親王古碑銘御再興の御撰文

重建勝道上人補陀洛山碑記

人籍霊境以進道境因勝人而彰名如補陀山亦徴
哉勝道上人創窮其頂精練功成弘法大師揮天縱

才文之詳矣於是世人昭々知其爲名山也其文則
載性靈集傳到于今而其碑則歷年遼邈掃也不存
嗚呼廢而不興非人情也近者余鼎樹貞珉刋其文
焉庶乎使臨者讀雄文以審靈境知靈境誠爲進道
之縁矣然則此舉豈曰無所係乎世有高談淨心幾
視山水者不亦謬哉因題碑陰聊紀歲月云

寶永二年歲次乙酉春三月

前天台座主一品公辨親王識

沙門勝道歷山水瑩玄珠碑並序

蘓巔鷲嶽異人所都達水龍坎靈物斯在所以異人
卜宅所以靈物化產豈徒然乎請試論之夫境隨心
變心垢則境濁心逐境移境閑則心朗心境冥會道

德玄存至如能寂常居以利見妙祥鎮住以接引提
山垂迹孤岸津梁並皆靡不依仁山託智水臺境瑩
磨俯應機水者也有沙門勝道者下野芳賀人也俗
姓若田氏神邈救蟻之齡清惜(意)囊之齒桎枷四民之
生事調飢三諦之滅業厭聚落之轟々仰林泉之皓
然粤有同州補陀洛山葱嶺挿銀漢白峰衝碧落礙
雷腹而鼉吼翔鳳足而羊角魑魅罕通人蹊也絶借
問振古未有攀躋者法師顧義成而興歎仰勇猛以
策意遂以去神護景雲元年四月上旬跋上雪深巖
峻雲霧雷迷不能上也還住半腹三七日而却還又
天應元年四月上旬更事攀陟亦上不得也二年三
月中奉爲諸神祇寫經圖佛裂裳裹足弃命殉道繼

姫石楠木

岩千鳥

花ハ千紅ニして
春候生ずる

婿菜

圖に出せし菜ハ皆深山に生ずるなり
婿菜葉とゝのハ深山より生せし里ちかき
山繁又ハ美郎ゟ自然に生ぜし也人見て食
べしとなせり蛭ひ極きりめなり

緯昌学

許一作計

負經像至于山麓讀經禮佛一七日夜竪發願曰若使神明有知願察我心我所圖寫經及像等當至山頂爲神供養以崇神威饒群生福仰願善神加威妻龍卷霧山魅前導助果我願我若不到山頂亦不到菩提如是發願訖跨白雪皚々攀緑葉之璀璨脚踏一半身疲力竭憩息信宿終見其頂怳惚々々似夢似寤不因乘查忽入雲漢不嘗妙藥得見神窟一喜一悲心魂難持山之爲狀也東西龍卧彌望無極南北虎踞棲息有興指妙高以爲傳引輪鐵而作帶笑衡岱之猶卑咤崐香之又劣日出先明月來晚入不假天眼萬里目前何更乘鵠白雲足下千般錦華無機常織百種靈物誰人陶冶北望則有湖約許一百

許一作計

我皆作師

其一作斯

頃東西狹南北長西顧亦有一小湖合有二十餘頃眄坤更有一大湖冪許一千餘町東西不濶南北長遠四面高岑倒影水中百種異莊木石自在銀雪敷地金華發枝池鏡無私萬色誰逃山水相映乍看絶膓瞻佇未飽風雪趂人我結蝸庵干其坤角住之禮懺勤經三七日已遂其願便歸故居去延曆三年三月下旬更上經五箇日至彼南湖邊四月上旬造得一小船長二丈廣三尺即與二三子棹湖游覽遍眺四壁神靈駭多東看西看汎濫自逸日暮興餘强託南洲其洲則去陸三十丈餘諸洲之中美華冨焉復更游西湖去東湖十五里許又覽北湖去南湖三十許里並雖盡美摠不如南其南湖則碧水澄鏡深不

岩澤瀉

老鶯草あり
石間の苔の中に生ず

丙申小春
椿山人畫

平御

栁櫻

季春
初夏に咲
櫻の花の小さきもの
柳のかゝ小細きるを
名附しなり
まゝ葉ともつゝしび葉を
老鶯草

雷一作電

可測千年松柏臨水而傾綠蓋百圍檜杉竦巖而搆紺樓五彩之花一株而雜色六時之鳥同響而異觜白鶴舞汀紺鳧戲水振翼如鈴吐音玉響松風懸琴抵浪調鼓五音爭奏天韻八德澹々自貯霧帳雲幕時々難陀之羃壓星燈雷炬數々普香之把東見池中圓月知普賢之鏡智仰空裡惠日覺遍智之在我託此勝地聊建伽藍名神宮寺住此修道荏苒四祀七年四月更移住北涯四望無尋沙場可愛異華之色難名驚目奇香之臭叵尋悅意靈仙不知何去神人髣髴如存念歲精之無記惜王侯之不遊思鐵兎而不遇訪子喬而適去觀華藏於心海念實相於眉山蘊蘿遮寒蔭葉避暑喫菓喫水樂在其中乍彳乍

于誤于
天皇一作皇帝
則上脫師

干出塵外九臯鶴聲易達于天去延曆中　柏原天皇聞之便任上野國講師利他有時虛心逐物又建立華嚴精舍於都賀郡城山就此往彼利物弘道去大同二年國有陽九州司令法師祈雨則上補陀洛山祈禱應時甘雨霧霈百穀豐登所有佛業不能縷說洛日車難駐人間易變從心忽至四蛇虛羸攝誘是務能事畢矣前下野伊博士公與法師善秩滿入京于時法師歎勝境之無記要屬文於余筆伊公與余故固辭不免課虛抽毫乃爲銘曰

雞黃裂地粹氣昇天蟾烏運轉萬類駢闐山海錯峙幽明殊阡俗波生滅真水道先一塵搆嶽一滴滚湖埃消委聚盡飭神都嶺岑不梯鶩鶩無圖皚々雪嶺

岩鏡
初夏に花咲
葉のめし紅
色なり葉者
に生ず
恒吉椿影
岩蓮
何亨寫
苦桃
花は初夏小咲桃の如くにして薄紅
色なり葉者実を結ぶ者木の実
より小なり八月に熟す式実熟せ
ば丹頂好ひゆえ延齢の菜なりと
称す富士山にて実梨子と云ものは
如此なり
芳馨
雪割草
樹葉の如てかるる
ものなり
丙申十月上浣
琴音寫生
式実赤色
なり

曷矚誰廬沙門勝道竹操松柯仰之正覺誦之達磨
歸依觀音禮拜釋迦殉道斗藪直入嵯峨龍跳絶巘
鳳擧經過神明威護歷覽山河山色也峥嶸水色也泓澄
綺華灼々異鳥嚶々地籟天籟如筑如箏異人乍浴
音樂時鳴一覽消憂百煩自休人間莫比天上寧儔
孫興擲筆郭詞豈周咄哉同志何不優遊弘仁之年
敦牂之月月次壯朔三十之癸酉也人之相知不必
在對面久話意通則傾蓋之遇也余與道公生年不
相見幸因伊博士公聞其情素之雅致兼蒙請洛山
之記余不才當仁不敢辭讓輒抽拙詞並書絹素上
詞翰俱弱溟恐玄之猶白寄以瓦礫表其情至百年
之下莫忘相憶耳

西岳沙門遍照金剛題

右性靈集所載也

中禪寺私記

日光山滿願寺者稱德天皇御宇神護景雲年中當
國芳賀郡人沙門勝道勤求佛道攀躋靈窟爲鎮護
國家爲利益衆生勸請於神祇造寫佛經始卜斯山
新起道場其山中央有嶽其高不知幾千仞其嶽半
腹有大伽藍号中禪寺安置丈六千手觀音像其傍
建立靈祠奉崇權現又妙法蓮華經一千部并大般
若經六百軸併納之箱底安之堂中每歲四月二十
二三日両朝之間有修大會前日講般若經次日講
法華經奉辨備三十三杯御膳奉供觀自在尊辨備

百八十杯御膳奉供權現王子件會住僧等守次第
勤行之已爲規摸敢不失墜爾後碩學相續勤來講
匠嚴重之儀不遑具記自茲寺至于山頂二百四十
町者結界地也五種相分四神具足其前頭有大湖
揚五色浪如八功德池湖之南涯有別所稱歌濱彌
勒大士妙吉祥天靈驗之場也湖坤有一梵宮號日
輪寺安置不動降三世軍荼利大威德金剛夜叉等
尊像蓋是本願勝道上人修練之砌也其前有小嶋
彼上人止住此島禮拜之次奉祈聖朝柏原天皇遥
聞此事深成感感令補上野講師仍号上野嶋湖西
岸有十六丈千手觀音石像曰千手崎弘法大師手
書山門題額補陀洛山發心檀門其門六宇蓋是宛
六度也化導無限遍被遐迹之鄉功德不孤必有隣
旁及幽顯境上自天子以至於庶民壹是孰不欽仰
誰不歸依哉其地之爲体神嶽蒋々送千嶺高峙靈
湖渺々寫四瞑而遥廻凡厥峻極之狀勝絶之美具
于弘法大師御作勝道歷山水碑文序今之實録粗
舉大槩而已于時保延七年夷則初三日吏部侍郎
藤原敦光爲貽方來揚確記云

武射祭　毎年正月四日武射祭の神事とて神宮乃社家一人愛ふ
社勢と墨衣なる手の光山し古文乃武射乃祭儀とて泥水の色ふ
て変武伐ふ日光町方又ハ近村の老ども光山し猪と敬ちなる
附系ハ乃武射一同ハ変と殺生上古よりの祭儀なりと以ふ

惡悲心鳥　此者遠山すく別ハ名ける出とて少べ其無象ちる紙

慈悲心鳥

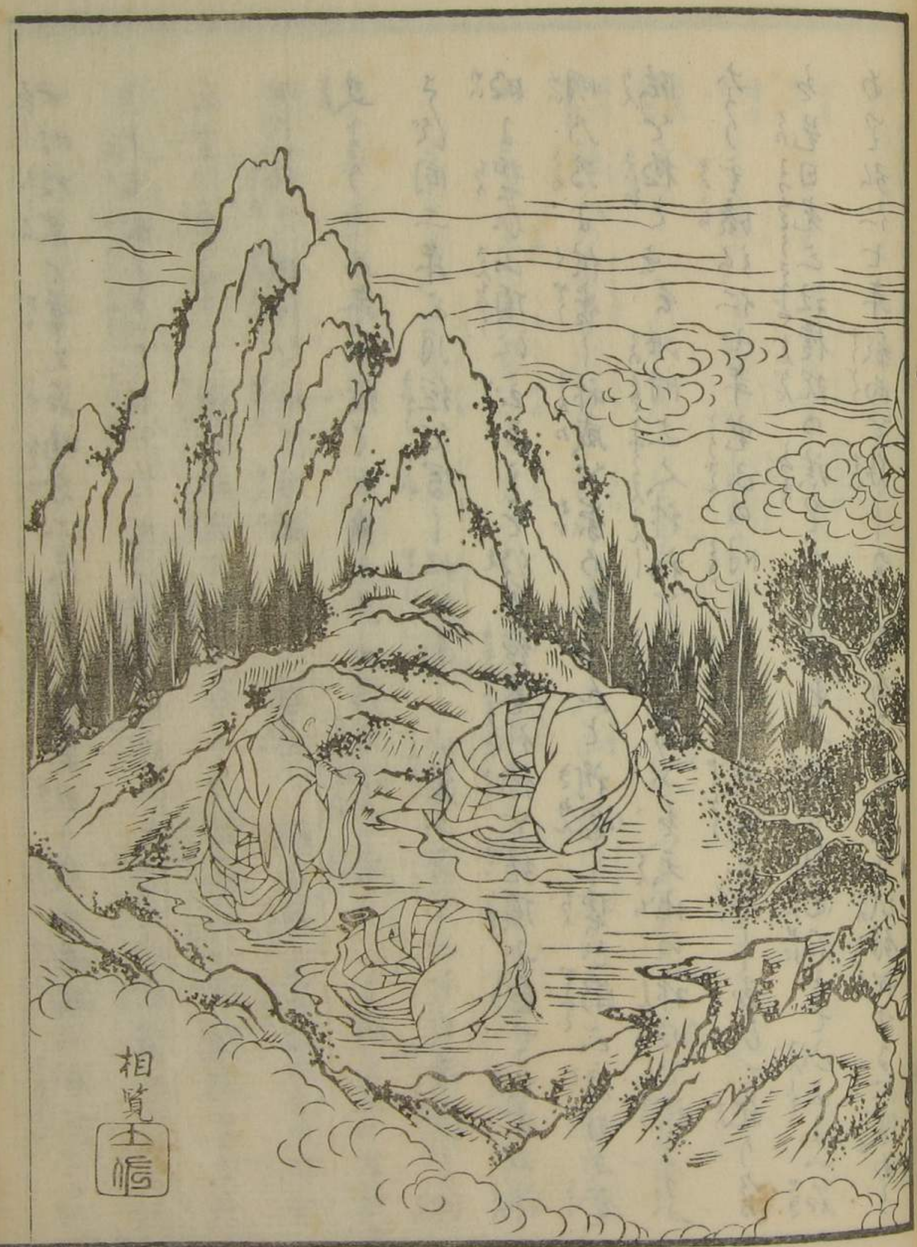
神山靈鳥自呼名毒夜曾
巒陰籟生鸚鵡久水宮鍾
語頻迦已脫鬘中聲珠林
開處啣花去瑤闕過時向
月鳴樹色深々看不見天
風吹度梵王城

紫溟驤

石阪藝教寫

いく者を称せるなるべく仏法僧を名附るなどの如き類初夏の候ひ
鳴を愛ぜり 此山中にこのぎしぶ荒沢寂光又を薬山者にも多く栖
る由時として古山内にも廻翔し来り啼くなり人家近き所へ来る
と稱あり冥の茶後二本宛なるか迷ふ羽色皆男の如しうるもの
鵯鳥の音聞りて社の辺先に榛名山へ出て社家乃家に食ふしなり
るじゃの活道なる道山なる三宝を戒行者などもやうの三宝を
稱ふ戒行者を称文なりけるといひしうど素はやく行しゆえ
啼ず三戒行者といへるを無礼者なうと舎乃なるじゃ活道
娑羅樹 或を娑羅双樹とも唱へ常なる桂といふ四月比花さく
由なるやされども桂とも大なる実なり山中なる多く生せり
男體山 二荒山補陀洛山黒髪山黒上山日光山男体山なのごく騨せ
り二荒と稱ぎ一説を常春なるを無礼者なるを黒髪山

と唱へしとの万葉集なるを見るに古き唱へなるべけるを古名が
活道なるかなる言山なて積雪深れど蕨なる巌の芽を松樹檜梅
等の古木積翠朦朧として黒髪なる見るなるより名附なる渭とぞ活し
或説なる上古乃御世なる此国乃名を毛国と名附毛といふ時なる成
熟れ名なり田畠なる耕して生ぎしすの城作毛と唱へ熟きなる
地を不毛の地と呼なるのなり国も神代より言山なる樹木れ繁立し
なるより国の名も毛より起れるなるや又毛とハ菜木稲蔬の生熟
なる渭とて黒髪山とも称なるなんといふ説の如きも是
理通なるに似なり又男体山の名なる大太子小太子の二子の称
とを生出なるなり扱蕨採頂口なより登ること凡三里の垂道なり絶
巓ふ三社を祀なる頂上乃廣さ南北拾町許東西三町など登道嶮
岩なて道絶なる危き所を多く海渡する事易し仍て古木の繁茂


相覽

四時枝葉を栄え石精を二尺より三四尺迄り或は躑躅の拱抱す竜
き大木数多あて林をなせり絶頂より麓くを四重の神秀あることハ
云葉に述ぶ〳〵嶺に神社を祀り多ふを猪名上人神護景雲元年
四月初て渡海を企て水路より雷雨〳〵路を迷て空るとを祈
文より十四年を経て天長元年四月又企て空〳〵んと渡海を果
さず同二年三月経を写し仏を図し山麓ふ至て一七日漕経し神
時より登り山頂に至ることを祈を経巻仏像を絶頂ふ垂て天地の神
明乃為に供者し神威を崇め奉らんと祈念し登り漸く度目ふ登
陸を拝と云云世時上人神祠を祀り多ふ天地の神祇を祀りの
なり後弘仁七年空山の時より三神の影向を拝し多ひて祀り多
を是日光三社権現の社をまし海を乃始て對面石を山上より一石
あり弘仁七年影向を拝し多ふ石ありといつ氏絶祀するに遂めら

れ祭頂して神秀あるを知る竜

万葉 士 うな玉乃黒髪山の山菅ふ小雨降しきすもゝ〳〵ぞ思ふ 人丸

後古今 うな玉乃黒髪山を秋越て木の下露ぬれまさるらん 同

新後拾遺 み吉野のうゝまかしらんことを恋うゝぬ黒髪山まふ迄る志ゝ雪 従二位家隆

拾川百首 旅人の袖吹返す山風や朽ぬ〳〵黒髪山乃夏月雨のこ孫 公実卿

同 うな玉の黒髪山ま吉ゝれたゝ谷を埋るものゝ我乃名ゝる 俊頼卿

うな玉乃黒髪山乃頂ま吉ゝも積ゝを志ゝ髪とやゝ雪 隆源

夫木 れゝのむゝ萩おんことを君もと〳〵黒髪のみ山ゝ 花咲ま久ゝと 西行法師

寛永十三年二十一回 御忌 物舎ゝ 公卿門跡宝山氏時阿野宰相為宗公業郷卿

明暦の初ゝ宝山乃

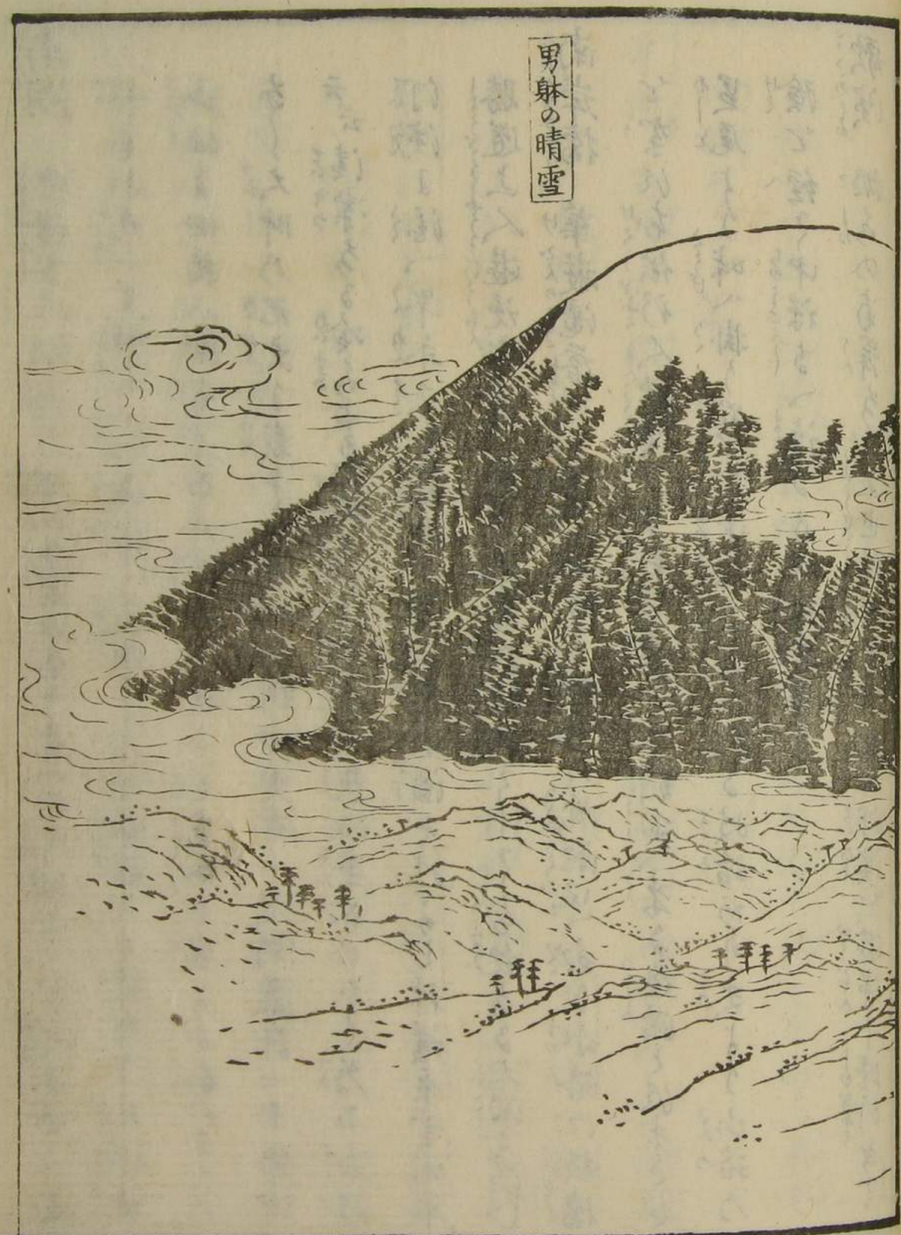
菱安元年三十三回 御忌 物舎ゝ 公卿門跡宝山氏付三條宰相為宗実教卿

卯月の初ゝ宝山乃

時しらぬ雪ぐひの花も交かぬて黒髪山ま迄る白雪

如宝山
小マナ子

隆斎写


男躰の晴雪

男體山
大マナゴ

南湖　中禅寺湖と唱ふるものあり第一の大湖にして凡東西三里
縦南北九一里強又八切滝池と名附ることを縁起にしるしたり凡山腹
山趾より四拾八瀑有と雖ども皆流れ出るさまなどを立所も宜しかれるもの
あり大師乃記文に載せるが如く眄坤更有一大湖幕計一千餘町
云云清潔なる冷水の魚鱗悉も生きび一類の蜻蛉なく巷小白波
打演る清へ早年又雨霖雨にも不耗不溢それ〻の神護奈雲元年
勝道上人遊覧されしより今も祝現然として奇観なる大湖とのみ
南岸橋　華厳滝落口より上かの湖水の流瀧口に成る小路に板橋
を架せも供行人歓演より芦を渡りて別所へ来る西路と成ることを
是尾より峠へ掛り岩上小中禅寺を分へ別る岐路なり丈より山路乃
険を経て中禅寺へ抜るもの往来なり
歓演　湖水の南岸なり上世補道菩薩の行演を遊覧し陸地なり

れし時天人下りて歓演の称賛漢きしを聞へり依て丈より此所を歓演
と称する由を四跡今花供行者の籠る所を宿と称する所を花
四跡なりと云
寺院　南岸なる歓演より西乃方に地を補乃師の開建かの草堂
大師の茅創と云て和祥元年四月此地を列て茅師堂を創建
しるひ刹乃本尊を安し堂の中に小茅庵を埋るひ薬師堂と
称号仮此茅庵とは天竺乃耆蹉醫王より一行和尚へ相伝乃茅庵
なる由此事八南山九古紀なる宸筆の八軸の文か出ることを少
南岸より八町程隔き出しぬきい小山の出傍に茅師堂なるゆ名寺
法華師堂と称する所なり
日輪寺舊迹　補道上人歓演を志び茅庵を結ぶ小附或説の義
大日輪の門に大菩の出現を拝しひ由名大菩を刻して此

石楠花（しゃくなげ）

而に茅剣きられ日輪寺と名附なしたる南岸なり

上野島　池地を中禅寺別所の島の湖岸より七町湖中に浮ぶ

こるぬく足ゆる島なり寄石珍木多しといふ傳乃上人の遺骨を納

厳石切り立ちたる景賞大師乃遺骨を納し塔あり仍て代島紅葉

頂の猿所なり

千手傍　池地を中禅寺より西寄の湖岸なり傳へいふ勝道上人延暦

三年四月廿日湖上より金色の千光眼れ観音を拝しまのあたり

愛に千手大士を刻建し補陀洛山千手院と名附なしといふ後

弘法大師巡山れ時池地に来れ千光眼を礼拝して補陀洛山登ん

擅門とこの額を書うひ書写し掲くるをい法の法ゆ要火を燈れ

焦土と卵とを文政二年の春一山乃法つ院上人職なり時に発願

に依て補陀洛山登ん擅門乃額字尚

所門を公獻大丞所筆を染させりといふ

千手原　是も千手傍より続き赤沼系れ南西かよれて廣さ凡一里

半程もあける由茅も往又伐る度に新芽を初出る之のもく匹

千手かんひと称する茅むの名産を生じ

千手砂利　是も千手傍の出清にて切り去白まて金利石のみ一或も

千手石とも唱ふ　千手清水　千手堂の後山より流出る清水なり

菖蒲沼　南湖乃小湊の入口をいふ夏の小湊小殺生禁断乃碑あり

是より小西南を境とせ

赤岩　南湖西寄乃湖岸かなり　白岩　南湖西寄乃湖岸かなり

猫瀧壺　菖蒲沼乃西より小乃山中に洞窟あり縁起にいふ傳道上人

の遺骨を代窟中に納むとなり

龍頭滝　是も湯滝の下流なり路傍より出る時も勢おのづから

龍頭滝其一

齢七十二
画狂老
人卍筆

其二

狂老人
卍馮意

能沢乃如し故に名附くる秋来れば紅葉乃好所なるゆえ別名を
紅葉瀑と也唱ふ洪瀑を南湖に落入るを数ケ所に瀑有て絶景な
る事筆紙に尽し難く之大概を略図して前に出きり

地獄茶屋　中禅寺乃別所乃意より湖水乃傍ひ凡一里程ゆきて往来
橋を渡て左上に向て名附る変ハ洪茶屋より東に当り男体山乃
麓に洞穴ありて窟底乃深さ知ざるゆえ古人地獄穴と唱ふ也と
て近きゆえ竟み地獄乃茶屋と唱ふ爰も湯元を往来れば旅人
中休の為に設く

本又寺旧跡　是も湯元往来橋乃東の山麓にあり弘法大師開基と
伝ふ迹と也今も校地乃みを名と伝ふ

顕釋坊洞　湖水乃入口乃所に往古洪僧が入水の所なり年く七月
演経頂乃時経法とも之供養とて弥陀経を括り付て湖中へ投じと人

回向也迹バ忽弥陀経を水底へ引ゆ乃ゆくしして沈む経頂ゆる道
俗寄吳の想を為せり

弁山　九き山なり湖水乃小ゆるく男体の南に連る

弁石　湖中より向て弁やまに当る也名附く

四條寺旧跡　弁山より前なて湖水の道弘法大師建立旧跡と元
戒壇院と号ス

法華窟寺旧跡　弁山の上なり天海阿闍梨建立

轉法輪寺旧跡　弁山の麓教是建立

般若寺旧跡　西湖の岸より向て弘法大師の建立なり

梵字磐　般若寺の前湖水乃内にあり弘法大師梵字を題じ乃ふ

若松崎　老松崎　日輪寺旧跡の道と般若寺跡の道と乃ふ

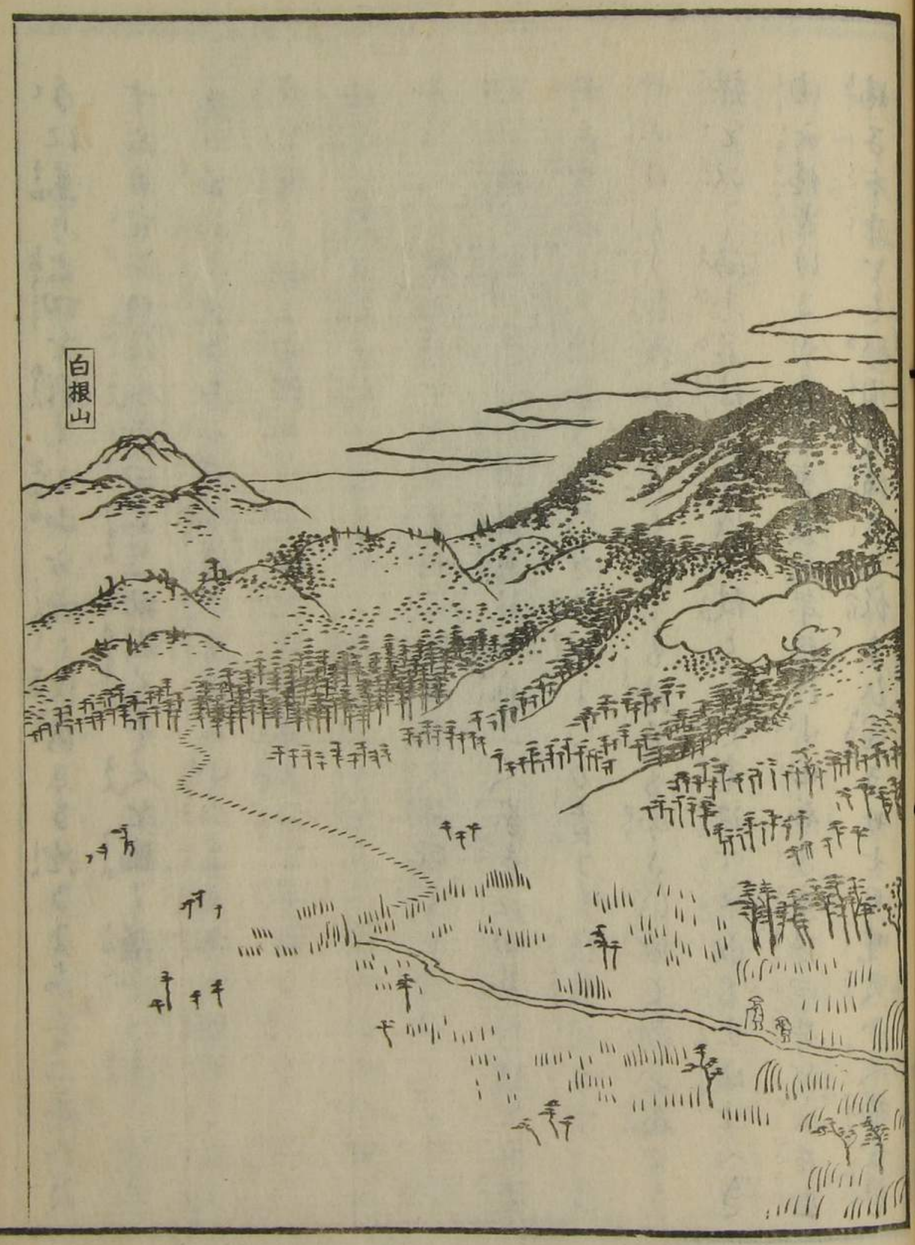
標茅原　或ハ戦場原又ハ赤沼原ゆど唱ふ迹ども標茅原の異称にて

竹谷富

赤沼ヶ原

別に其地あるなり〻ゆえ赤沼と唱ふる本流を班野の中に清水湧出
乃是沼なり開祖上人願伽の水と汲のひ〻渭を砌き後世ふれを
願伽沼赤と云ふまた赤沼と云を称戦場し時血あがれ〻赤うし
と云ふ説ようい色り赤戦場赤ゆえ名も出より起り〻出で班赤野
を中禄古別所の道を去り濁元入口を三里乃行程なり又云標芽
赤を或を忠女沼赤と云を
昔今 往たの先志めぢう赤れさ〻ば父我世中ふかのんかぎうを
載 いの報迷ば標芽赤の変赤れさ〻も変て枯果て牛乃異
六帖 下野や標芽がはれさ〻ば父なのめのおひふ身をや憐し君 円
新六 芽〻比君を先ぢう赤ハ事枯て身をあ婚乃形くみなし
文永 たの先志〻標芽赤の下蔵下にうえても事色うう〻 後撰
円 下野や志先ぢう赤乃芽がれさ〻ゆるなりひそ 光後拾遺

中禄古別所より濁元を三里と以ふ湖水の際に陸ひ一里許
も行て菖蒲沼なと以ふる所を沼乃中に未ゆ先茅多く生茂
ゆえ名附〻を文より本立を色り赤沼赤を逼ること二里許よ〻て
濁元小和るすべて湖花ふる平赤或を芝生乃地多く数名乃仲花
あを表元俗おく迷四月比ふ色り湖表乃時氣を濁て数百種
乃ち一時ふ開き爛漫や〻花種と法〻称するこのゆ〻ゆえ小一名
と出花畑とを唱へり
戦場原の説
上古神いくはゆ〻所とを以ひまた遠に後の世みを見ても種食
出所油蔵紀伊下野の小山逼沼き〻る先ハ永徳元年の年うて小
山右ふ改我政を子義大九郎へんと色〻種食の下知を敷きける
ゆえ右を清督敏出るせ〻る洪時常陸の小田漢波を入道父子法先


白根山

其二

手に余り太刀を抜し小山の城く攻落さる抜るゝ赤菱二年五月
十三日古河の住人野田太郎助因人を擬く通舎へ来り此時
その白状申きるを小田へ道案内父子小山丸と同意し為丸
丸を殺し雪る由城中に小田父子先年忠功を尽きる人多り何乃
昭宥て歎き同意殺し者るやと結ぶこの〻同き六月十三日小田の
子二人百領七月十九日爰外上杉中勢大捕朝家を大ねこして小
田の城を攻け迫で小田直高並子息二人家老伝田某等城を落去
野尻男神山へ橋籠る此所を言山まて力責るも難義同き十一月
廿四日より和戦ひ久るとい〻ども猪頭も分らず依て通舎原より
謀を以て海老名伯中守城に使として免許て社城召出城すべき
由社伝者ける中を翌康慶元年五月小田苗子息孫四郎を社石出
嫡子左郎を那須越後守へ所ひ同き廿七日暁天小又通舎勢

攻よ伝る小田この家臣等百騎人討死し城を火を熱て溺る者ど
も没落せりといふ事大筆紙に載るゝ此物小山の家を亡ろう姓
若治承年中より右大将家に仕し小山左衛門尉政光子三人各
武威を輝し通舎公方家の世に成りて元関東の七屋形と称する
内あるゝ一時に滅し又小田亜言の家い宇都宮の元祖宗亜三
郎宗綱より出く是も連綿とし〻常陸に住し七屋形乃内なる名
家なれど此時に亡ろう佐野兵男神山とあるを今も山中に幕
張櫓弓張櫓かどいふもあるを去なるゆたしん程後の考ふ
備ふ

白鶴　古人三社権現乃神者ありと号けむ一番のミ此系
ふ伝ミけ是雅を養ひ久迷どいはぢ〻この翱翔し去て丹頂の番も
のを愛ふ是先り四百十年前を系北乃中ふ遊び居るを湯元へ

徒及する旅人ゝを警策する事も亦近く見るものもあるしかど近来ハ
見るものあき由さゝかゝ神廟の伶人迦山といつるゞ話れるをれの迷
惑より白鳥を見んとゝ欲する素より秋を乃内一度苑中深きよ
り濁元へうけてゆきまゝせ〜に昭和の末安永の始れ多るも京北の中
みあゝう蓮蔭のうけ天六尺りやるあんよりを話を出し者ゝうる
を見るを迷ゝう後年毎る代世を逗迷ども近きころを絶てを
併ゞふも見ざるを近世人乃心をあゝく臺者のえゝざ迷を立而
を弱んゝく蓮蔭残分へ扨なゞきゝ由を神者もかそれく者く蓮
蔭乃中へゝく迷ゝる事ゝうんと話迷を

野端湖 男神山乃西ふあり廣さ九十町ふ一里許ゝう湖ゝの廣狭
をゝふい皆二十ふ町を一里と定めゝ方者と知べゝ下同じ

西湖 千手滝ゝう西ふゝる由を者とを或を薊ゝうの湖とをいふ

凡一里に二拾町許紀文ゝ西顧亦有二小湖合有二十餘頃と

蓼湖 男神山ゝう乾ゝ西ゝる蓼茅多き由を名附廣さ二十町許

狩竜湖 男神山乃後の方を麓の葉に沿り一説ゝ上世山中ゝる人
を害ゝる毒龍すみけるゆを竜神ゝ祈竜ゝひゝ由を名附とゝふ
余所の方山灵地ゝを山宮あり

魔湖 芦を奥白根と茅白根ゝとゝ乃名ゝふ沿ゝう白色を漂ゝう深き事ハ
数ゝるゝ代湖乃端へ長迷ゝく近附くゝりのゝ迷由を魔湖と名
附ゝる廣き湖ゝを沿ゝぬ中

併湖 芦を茅の魔湖とゝ対しゝくゝり廣さ三四町四方を有べゝ仏
砂利を出ゝ湖乃形を山城の弥陀乃堂宮ゝうとて名附ゝる由形
蓼を白粘山乃係に出ゝり

絹沼 茅を神祇乃内ゝを迷とを陸谷郡栗山郷乃山奥由を形て湖

あをそこるりの稀なり御山内より栗山尾を六里の山路すてゝ又
栗山尾の内湯西又河俣などいふ所より洗足沼を山路六里といふ
合て拾二里の山路絶人境乃絶る所也樵夫するの路し
唯古より伝る所を語るのみされども男体山太郎嶽又を奥白根
山皆此絶頂より遥かに見ゆ方位を男体山乃小裏に当り高さ凡
一里四方弘大師の記文云北望則有湖約許一百頃東西狭南北長云云
又云覧北湖去南湖三十許里云云を沼沢乃清潔にして美景珍水沼
岸に連て松檜枝を垂沼底も深くして砂石皆悉く彩乃色をなして清水
鏡のごとく悉く色に見ゆ蓮の華さかりなる紫色にして織なる
錦の如く四季乃有常に絶ず偏に仙人境とをいふ所也樹木皆岩上
に屈曲して曲折自然の奇色なりと仍て鏡沼と称きしを今ハ俗
沼と号て水来る方へ流れ流る方へ流れ蔵命津へ注りまた一流を上野の山

中へ流入て利根川の水源なりもしかるとも水路をくれも見
定難たるものなり諸国を流れて遠く摩陸下総へ流れ入て鬼怒川と
称するを彼人の知る如なり赤沢沼沢上世より一沼なりしを
由なれども色いたのにしるやう分裂して七十二沼となりて流い次
第くに合流して鬼怒川と称し迄り
湯湖　是ハ湯元ふかり廣さ凡拾四五町ふ二十町許
中禅寺温泉　八湯　中禅寺別所より西北に凡里赤沼系を逆湯
元を三里日光神橋より六里あり雲も風雪威すげしく三月末
を以て繰雪乃西北四月八日を初とし次第に谷湯室を開き物ム
迄ども毛白根嶽をまとく沙雪深く五月末より六月ふ初らざれど溶
もるをのもおし九月にも糸山は雪降る九月八日を限りとして
湯室をとぢて蟄く下る日光町方の人の打とす湯室を開き日く

温泉湖
武州不退林憲

中禪寺山奥温泉場之圖

日光町より米穀園蔬を初め乃法器を脊負ひ送る

藥師湯　才一眼病ふ

河原湯　熱湯冷湯

熱湯　熱湯冷湯

姥湯　黑若味

中湯　熱湯

上湯　湯才一金瘡ふ効あり

自在湯　平清水の時ハ湯ハ自由なる時

荒湯　熱湯

湯平　温泉の沿革九郎あり年始と絶と成るなとも歌り紀

きり代温泉を開闢をし年代未詳九郎の屋敷を名百廣み

様へ〻を地形を大抵平田〻〻三日町往元百姓々れと東寄

の山際より温泉生ぜる少志皆東北山寄に連絡き西小乃方に

平田続けどもおしく低く古を変なも一面の湯沸うて有しゆゑ

人今も蓮葉の水ひ成ぜり叔世ハより上長沼田終への間なり

其山端のこと八次ふ記るをり

金精峠　湯平より西小乃名ふ金精沢と唱ふる渓間に往ぶを険隘

の路を伝ひ行事一里半の程を経て峠に到る金精乃社を八一里半

丈より半里を望て峠より金精接現と称する小祠あり祭

祀ある迷ひ往古紀の人納るるや剣ふ減金せし男根をもて祀

祭と称ふ中古まで自然ま男女交合の形ま出来る古木の招様

を納先ふ法類を祈ふみ結ひりとゆふ伝ふ社を湯亭のり

物とをり叔氏祭の古名を櫛峠ふ和名抄ふ木枝相交下陰を櫛

といふと云ふ名れを天当相通しけるようしていたしこのきりり峠

と称せるなり茲の山中ふ肉蓯蓉多く生ぜるこ名もの名も

きりり草と味ま氏草八茶品まして能腎経を補助するこのなれば

とく往ぶこの茲ふ陽物を祀まて金精と称し古名の櫛を称して

肉蓯蓉

初夏のすゑふ生じ丈五寸白く上に花のごとく咲き実るりの色赤し

きもりと唱るより今ハ又將棋してきもりのむの音をまに移て鄂芳の唱へを置ること笑ふ蓋きにあらびやされども又音に通用せるゆより紀氏是又氏沸を上野下せの國界に接して茲より西乃方へ下る七四里許の嶮路を踰て上沢沼田に近き小川村とゆふ多の人境を去ること遠からず道すがら更より越後へ元ゆけるといへり事に人は西行なり

茶白根山　湯平より乾ふ南る又白根沢といふ所ハ湯平ハ西の方みく氏沢より登りにあり西ふ連る山岳も皆白根山ハ直り出うる峰巒なり茶白根を頂上を凡三里許六月ハ雪ありを谷く深雪所く消ずして湯屋より居ふ夏の時も積白雪を望めり光山を るるを嶮くして絶陵を行こと或八十町又八町も攀し尖岩を踏て漸く光りて茶白根山の頂上ふ到る又奥白根山ハ実凡とし

白根山
奥白根山
魔海
沸海
前白根山

白根葵

椿山人寫

生

西は特立し皆石山なり樹木更に生ぜず巌白柏乃頂上より昇降
して究めんとすれども一里ばかり実に灵山なり巌石所々に若桃と称せ
るものゝみ一面に生じ花咲き月実を結べり大さ豆ほどなり
色赤く熟せり丹頂花を好く熟せしれば来りて実を食ものと
此山中数多く蒼桃を翫の好る菓なれども延歳を保つべき菓品なり
りといふ絶頂に日光権現祀れる社あり蔵王権現と崇む
社を重祠造り承暦元年奉納の銘を此山巌焼出せしハ慶
安二年のことなるに震動日を経て不止尚山
神座を命じ玉ひ野宮指殿造り八講仏修行戒を妙典を誦せさせ
給ひ造る重時絶頂燒破れ赤沼系を焼き燒灰二三尺積り上表又ハ
舎津然へも燒る由燒破れ一町許の岩穴と成り深さ何十丈
といふことを考へ侍るに往昔より勅使ありて石宮も此時宮中へ偏に
けるを志賀明神に造営して奉納すといふさて此巌を上野下野の四郡
ふしく上表の方なる八分目と覚しき所に社あり麓を上野乃
地なりく被去りて荒山権現と崇め祀り生古神とし毎年告饗
を奉らとなるを志賀より取る牧糸を紮ごとに携へ各社よ
り注連を曳たるぬく結び合せ葉をはなぎ附くることを数多け
れども何とも考へ難きより所を布ゐ引まへるやうなぞ
見えける幣帛も見も当所の法神とは雖なく社号はかゝ迷なるのみ
とぞ唱るさて迷む峻嶽と赤沼ふ其の赤乃こより絶頂をと
当国の地にして山乃八分目より西はこなる彼国の地なる由此
山岳をとりく古国乃場とはとぞ扱嶺ハ高見ふ雲雰掩ひ小
風動くれば羽社の四至を巨岩を聚てたゝみ揚くるを志岩室の
内ふ社を造営しぬくに石る四方八面ふ尽きり古人いふ白柏巌ハ

男体山乃奥院なりとそいふり山乃中腹を悪猿峯といふ縦物多く
樹叢の間に石壇と称する白根人参或を白根蕨白柏葉等を産乃
其余珍木多く茶器とする之の美連珊瑚とし枝繁しがさし登岳
白点容易に発陳する事とを由るさしで佳くいふ山嶽に麝香といつる
言すみける由を形を見ることをあけ迄ど採頂をしるの打ふしを
糞ありとく拾ひ得く因迄り砂麝香あどいつる之のより珠に香
気まさ迄り実に彼畜の糞なるるや全形我見まをしきるり阿弥
陀洞を茶白柏と奥白柏乃間に而の

栗山郷　十ヶ村境谷数あり　西門　日向　渡西門　古呂紀

基紀　上栗山　下栗山　野門　門俣　門沼　乃村くく河山内
遠より小の方如室山の小裏に南り如室と男体の間ある函谷峡
経く富士見峠といふ峻山を踰て行る村落の剣くくる年時も紀

屋この〻に近く山中乃村落を迷を島北とく元僅に岩石の間を穿
て他迷る由を登実する之の少く丈合一年の作物く男女ともに
山中へ入て勃揺し男を多獣を猟し或を合ひ或ハ販ぎ之を移函谷尖
峰を渉り岩蕨あど採もの木を伐く板に拵て日光へ出ても山
路狭き機乃多き由を之四尺に切く背負ひ出し或を弦するも渡
くる牝る由を嶮路崎嶇とし〻く行易かく也穀に かへく帰る
冬を家に居く木薪木炭に木後等伐る之の迷来栗山捕とて
曲物造の器を出也見を谷門乃水を汲元捕ありといふ兎如も縄褐
をまとひ山へ入く妻木をとり時に陸て榛実栗に多く迷を見て
拾て食物の設とし又栗山の長なるこの之頂をふ刺佳く吹ふ古
平家の残まの氏山中へ隠迷しを而ありし氏を小松を称する由されども
家義とする古文書古器などを之乃迷を之来由も定りなく

栗山深谷岩茸取

椿山外史

所々温泉

板室　日光より東北行程十三里中間の形如し

福和田　右に同

滝　滝村より日光より東の方行程六里を隔て有り

湯西　是も栗山の内湯西と称す有り治効顕然

足尾峠　昇降一里宛なり日光の方へは東北に下る細尾村へ出る

丈より清滝村へ越る日光山内へ通る行程二里修験の乗居

一宇有り北に坤に方へ下れば渡瀬と云足尾に新梨子村に属す

山村なり夏の谷奥中禅寺乃湖水乃南の方なる結岡より涌出せ

る谷川渡瀬乃邑より流出るゆえ南流して利根川へ灌漑するを

渡瀬川と称するいと迅なり沐の下る武川を渉て足尾村を二里

沐より三里なり又沐より峰漢に乾へ達する乃ち足尾近辺より

塩原　塩湯と云日光より東北行程十一里温泉ひぎんにより

荒井　右に同

小俣　栗山の女貌山の北に当る行程九里婦人一切無し

日光澤　栗山の内にて二里山奥に有り治太振厳に同

中禅寺又を湯元へ往反する乃ち沐より一里半許まく渡れ乃

南岸橋を渡りて中禅寺別所に重へ出る又を南岸を伝ひ行を赤

沼茶へ出る湯元を出る乃ちとふ先達利兵衛ひとりのみて中

禅寺乃湯へ婦人を浴せさせんと欲謀を許容ゆるを温泉も繁

業すべし路次を上足筋より足尾峠へ掛り武道を湯元へ往来

き女人半ば標制の中禅寺へ出ず日光町筋よりも清瀧細尾へ

掛り足尾沐より武乃を行時を経る返村へも出て湯元へ出るとて

を乃を内く切開き利兵衛を運しかれども湖水の南岸を花崎乃人

の勧めるを不すく欲渡を初免年禅頂行法する南乃道を絶

てあらざるゆえなりとて出を乃ちとふさを乃べきことなり

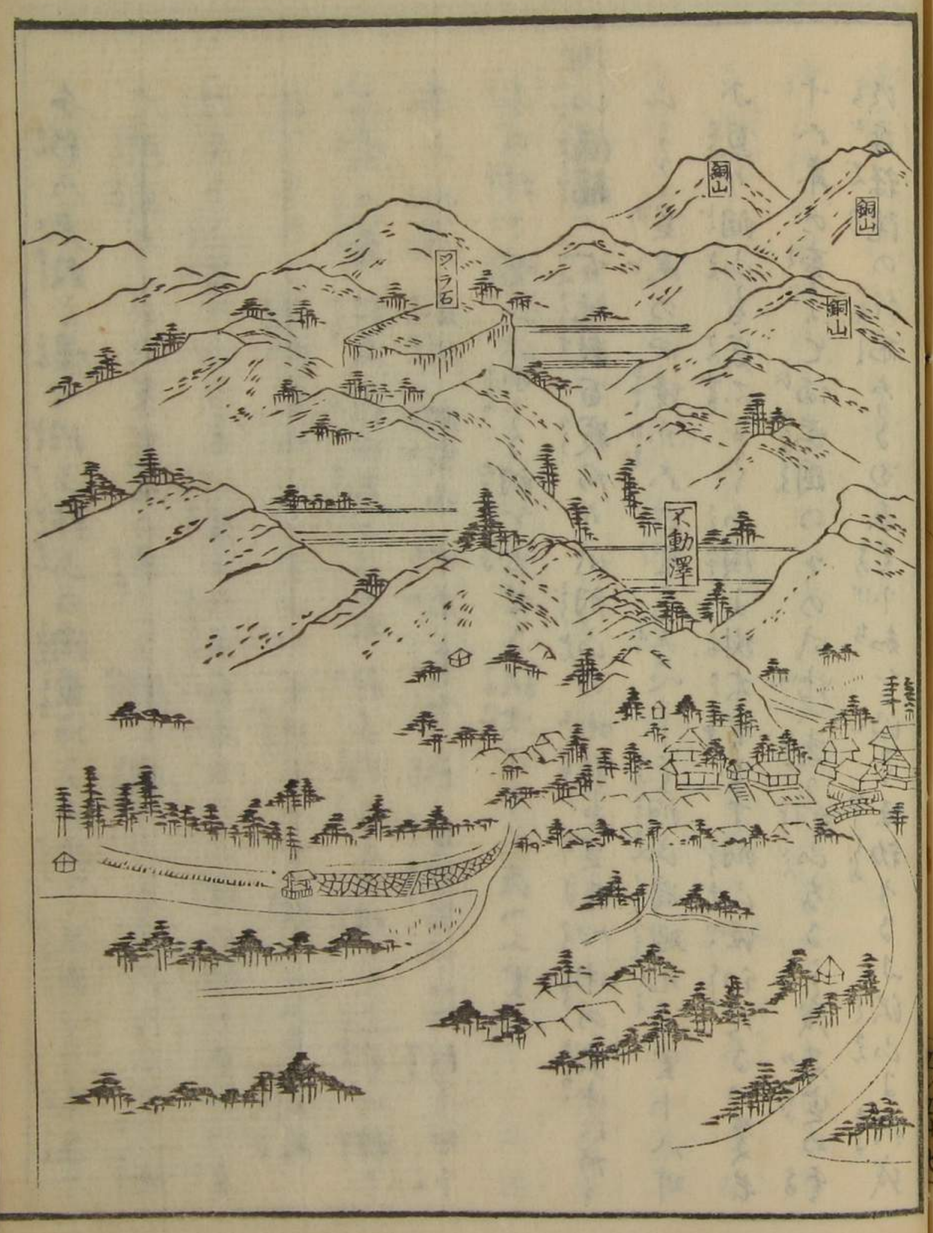
足尾郷　日光山内より西北に当り行程六里許神祇と唱ふ国西蘇

邪の国に足尾十四ヶ村を上下に分つ古を新梨子赤沢の二村を足尾

一鳳

羽姫の妻子皆古布まく
掾さる猿子袴といふものを
さらき羽と石とを沙法する図

足尾郷畧圖



手彩乃戸数と唱へ羽山神山の麓盆にのるゝ依く法國より来集し
て繁業をしゝ延享寛延の末より漸く衰て今の家数も二百戸許
村居を山谷の地に点ず山麓ゝ村民散居せり二條の路を南小へ達
ゝる乃ち廣狭東西二里南小一里許を十四ケ村こゝゝを間数
赤倉 久義 松本 仁田元 言系本 神子内 此の村々を上分の村と
唱ふ 掛ケ 赤沢 新梨子 中居 達下 系 庵民居 此の村々を下
分の村と唱ふ此所より羽を出せる訳次の通り上長ゝ二里
洞山澄觴 古坑数百穴あり此羽山の地形を足尾中の麓中にあ
山ゝ足尾の四境外六里毛乃ゝ羽山周廻凡三里十八町
ゝ直り羽山を岩石ゝ山頂に樹木生ぜず羽山坂初たるハ爰也
十六年の事なり徳蔵國の元の代地ゝ来り羽山あるゝ銭足定めを
以産祥院の紙面あるゝ由表を始ゝ坂初るゝ小沢山に羽銭

坂初ゝ問吹羽を以廳ゝ差し以
御三代將軍家初ゝ御巡所乃折の由表者ゝ
る羽山との事にゝ支より御用山とあり貢賦の外ハ田畑の支配
なれど羽山を御代支乃指揮とあり暫ゝ支配し享保年中指揮
下令答莫大のこと度ゝなり又元文の初より御用羽乃外ハ臨時産銭
仰付暫時吹色けるゝ中銭乃裏ハ足の字銭也ゝ表ゝて鑄造
きしりの為ゝ以来ハ御下令ゝ止吹ハ改文より羽山表微し
臨銭産を御免を願ひ殖困窮ハ及ぶといふ今も羽吹御代
皮掛りゝ陣屋ゝて手代立使ゝるゝハ表の如し南面羽山と
足立し彼茶乃元の大る貨殖し國ゝ国ゝ一時代所の新茶
ゝ村の浄土宗ゝ大国寺と唱る地内へ石碑造立し開闢乃来由
を誌し亟ゝる今を安倍の名寺も荒蕪し石碑も又剥落し文字

湖子

山中銅穴圖

足尾村不動澤

知辺ざ数由尚時を陣屋の例か羽吹分小屋四六戸ハ双べり

銀山　足尾町より西ハ阿ら足二里餘地形四ツ町程ある場所なり

猪山ハ日光

市門を市拾山と為ハ通り国土を奉り村民孫の山あり〻〻ハ今ハ

猪出ざるの由を体ハく山所ハ同るものを命じ金を

庚申山　是も町方より西北ハ程ハ二里許ハ山を自然ある奇石種〻

天造の如くなる形猪をなせ是ハ近き比より山中ハ奇数ある図を

捧剣〻遠境するを乃ち近ハ人等誘引きり或ハ以ハ此山中ハ

白猿一匹出るを庚申山と為唱へ又ハ猿の浄ちも称せとハ

日光猪鹿の名産

銅　足尾より出る　銀　上ハ同　熊膽　熊皮　是も足尾ハより出る

蠟石　日光蠟石を平章を修細ユりの小造る石ハ是尾山中より

出す今ハ上品の石ハ出ハくし白き石のみ多〻

飛禽

慈悲心鳥　山の奥ハ多くすむ中深ハ又を栗山ハ迄にすめり市山門ハも

朝朝〻来て鳴呼の声を聞て名の名ときり

駒鳥　山鶺　山鶺　山鳴　岩燕　鷦鷯

龍鳳　是ハ鳳ハ鳥の中ハ鳳ハ

魚蟲

鰐　鱗　岩魚　大谷川ハ多く谷川ハ生ず　山生魚　是も同ハ山の中谷川ハ生ず

田此ハ又ハ鮒を活するなり

藥品

黄連　直根人参　日光人参　市種人参の中ハ山村斎地多き中ハ沢の間多く他ハ

必ず利ハ山ハ茅多くれと悪しるさず

草木

白根菱　白根蘭　白根人参　各白根山ハ小生ず　雪割草　苦桃　岩千香

岩菲　程く領　梅樹　是も皆市中ハ日光蘭　是ハ素蘭のさりなり

千手がんひ　滝ハ多のほとりハ千手ハ　蓼湖乃蓼　石楠花　鄭躅　男体山ハ大木多し

庚申山
奥院
ヒラ岩
タイ石
カマ石
二王石
二王石
脂肉々り

ツリガネ石
ヒキタシ石
宝蔵石
トウロ石
石橋
二ノ門
一ノ門
石橋
モンジ石
ヤグラ石
ウラミノ滝

熊谷茶　敷島茶（茶に似るものなり古樹と一所に載る時は茶敷島茶は絶るよう熊谷敷島と名附るものなり）

緋桶　白檜　唐松　姫小松　虎の尾　松ぢく（枝葉根小形くう世りのまに似る）

沙羅樹（交樹と云て中禅寺山中にあり）

走獸

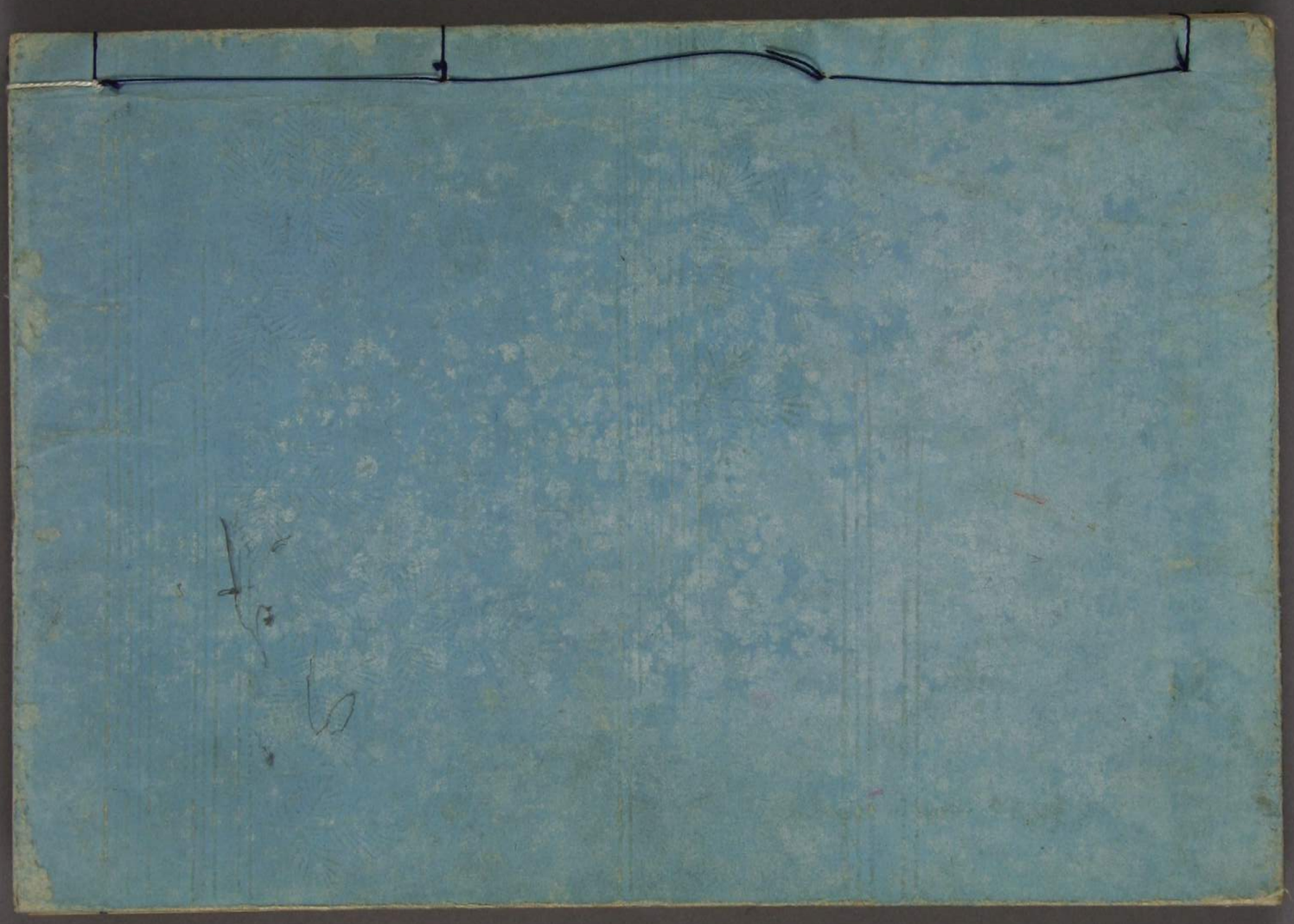
熊　羚羊　猴　猪　鹿　猿　貉　貍

飲食類

岩茸　獅子茸　椎茸　松茸　栗子　胡鬼子　漢蕃椒

湯婆（名義未詳）　香の醢　平素麪　婿菜　陸鼈

細工物

春慶塗　指物細工　曲物類　挽物　栗山椒子　木鉢　曲桶

日光山志巻之四終